

第五章 御家名物

『享保名物帳』に記載されていないが、大名家で記念すべき銘を付けた名刀として、御家で宝物としている刀剣がある。それを御家名物と呼んでいる。例えば、上杉家には「穿鑿江」せんさくこう。「かくれみの神息」しんそくなどがある。それらは、本阿弥家が上杉家に將軍家の命として問い合わせをしたとき、上杉家では「穿鑿している」とか「見当たらない」などと返答したというところから付けられた銘という。大名家が、いかに名刀の収蔵保存に意を尽くしたかを垣間見せてくれる。これらの御家名物を、『享保名物帳』所載の名物と区別するため、号をつけて「号 穿鑿江」などと呼ぶこともある。

重要美術品

脇指 銘 相模国住人広光

康安二年十月日

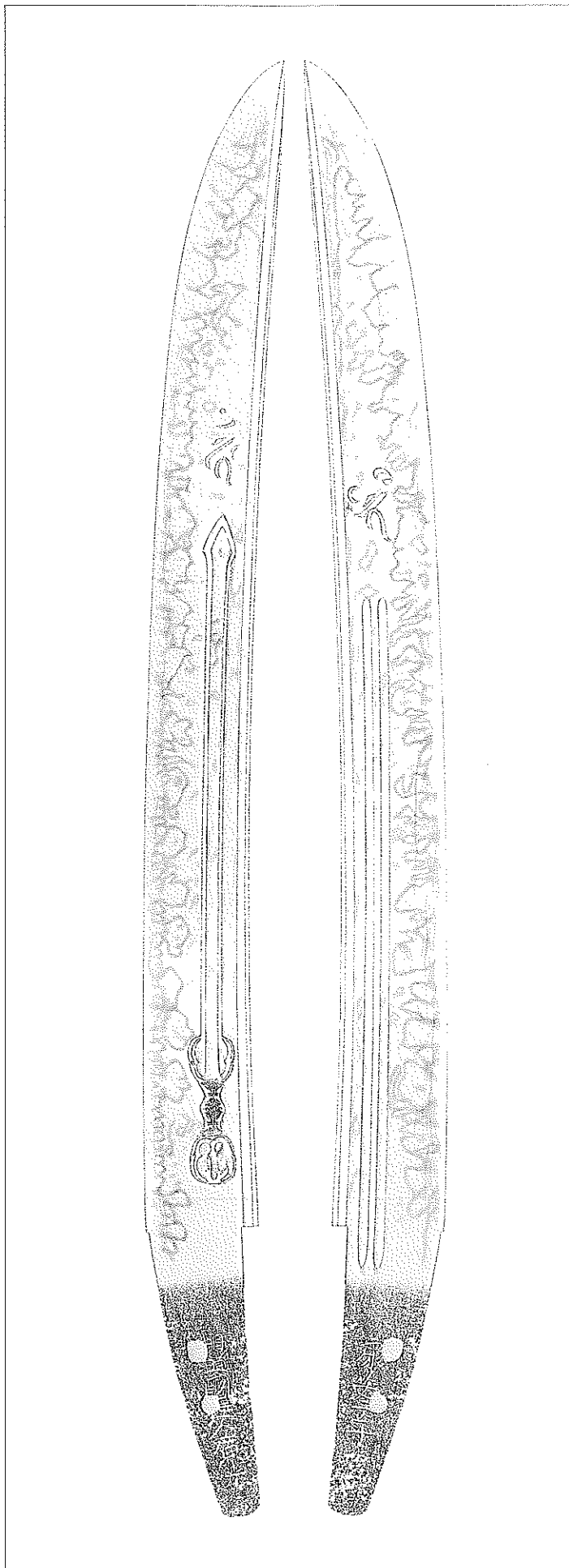
火車切広光

付 黒漆塗小サ刀拵

刃長一尺二寸七分(三八・五cm)

茎長三寸一分半(九・五cm)

南北朝時代(二三六二年)

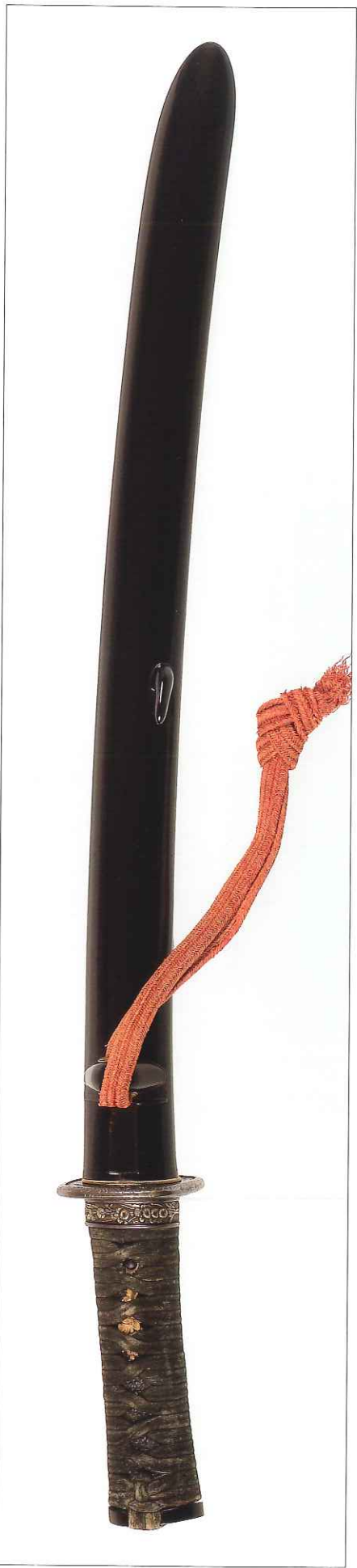


人間技とは思えない凄さがある。姿は平造り、三つ棟、身幅
 広く、ふくら張る。地文は板目肌に杢目交じり、肌たち、地沸
 厚くつき、地景派入り、飛び焼き、棟焼き入る。刃文は、丁子に
 互の目交じり、足・葉よく入り、皆焼となり、沸強く、金筋・砂流
 し入る。銚子は乱れ込んで尖り、深く返る。彫物は表梵字に三
 鈷柄剣、裏梵字に護摩箸。茎は生ぶ、先は切尻、鑓目は浅い勝
 手下がり、目釘孔二つ、表に相模国住人廣光、裏に康安二年十
 月日と刻む。

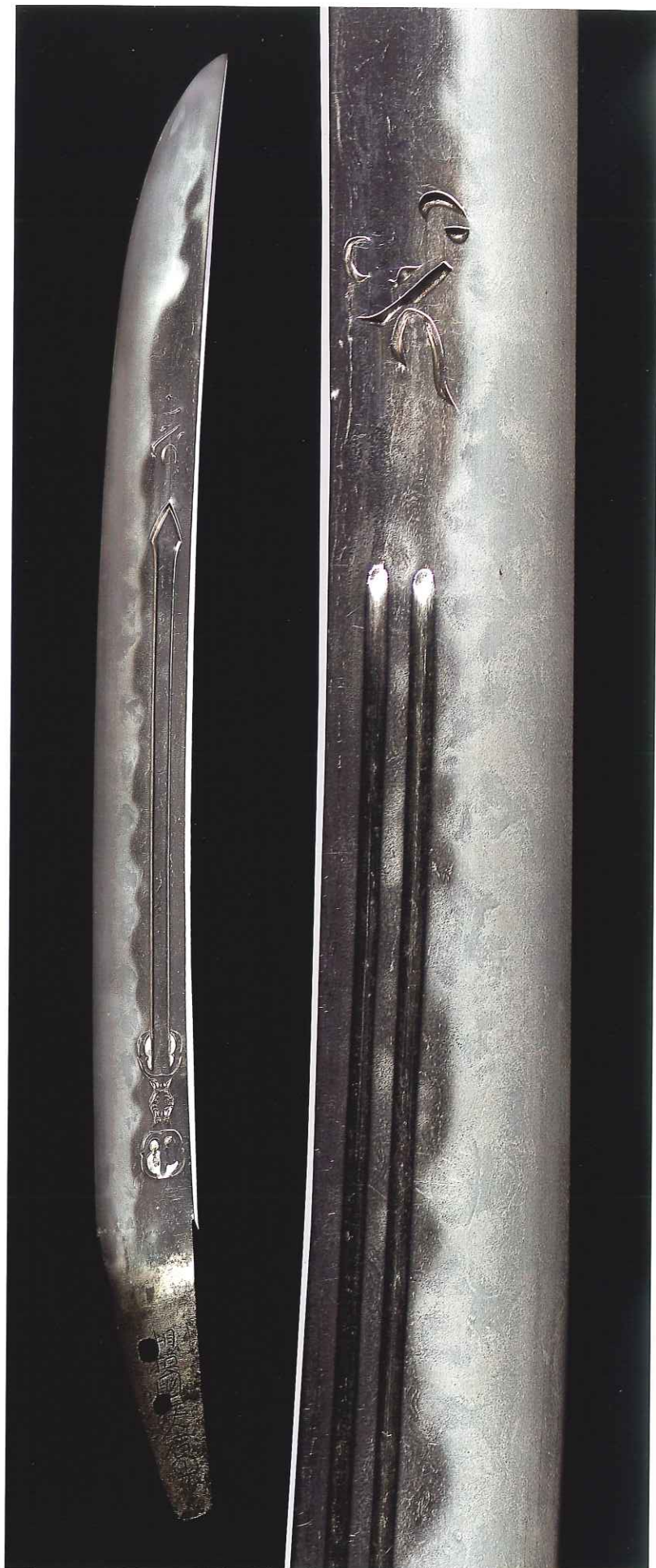
広光は、正宗晩年の弟子とも、貞宗の弟子ともいわれ、正宗
 風の沸の妙味を最大限拡大して、皆焼という新たな作風を創
 始した。この脇指はその中で最も華麗な作である。

小サ刀拵の柄は、強い立鼓形、黒漆塗絞着せ、黒革巻き、頭
 は黒塗角と縁は青金無垢、野菊の薄肉彫、頭・縁ともに大きく
 張る。目貫は金無垢枝菊、鞘は丸鍔が尖る。鍔は小さく、角丸
 形の角鍔で、銀色の覆輪をめぐらせ、両櫃式、切羽は金無垢。上
 杉家の特色ある作風である。

『上杉家腰物帳』には、五十二号に「火車切広光 脇指拵
 御重代 三十五腰の内」とある。火車切の意味は明らかでは
 ないが、本刀には表に不動明王、裏に毘沙門天の梵字が彫ら
 れ、仏教的な猛火の燃えている火車、罪人を載せて地獄に運ぶ
 火車を想像させる。



黒漆塗小サ刀拵

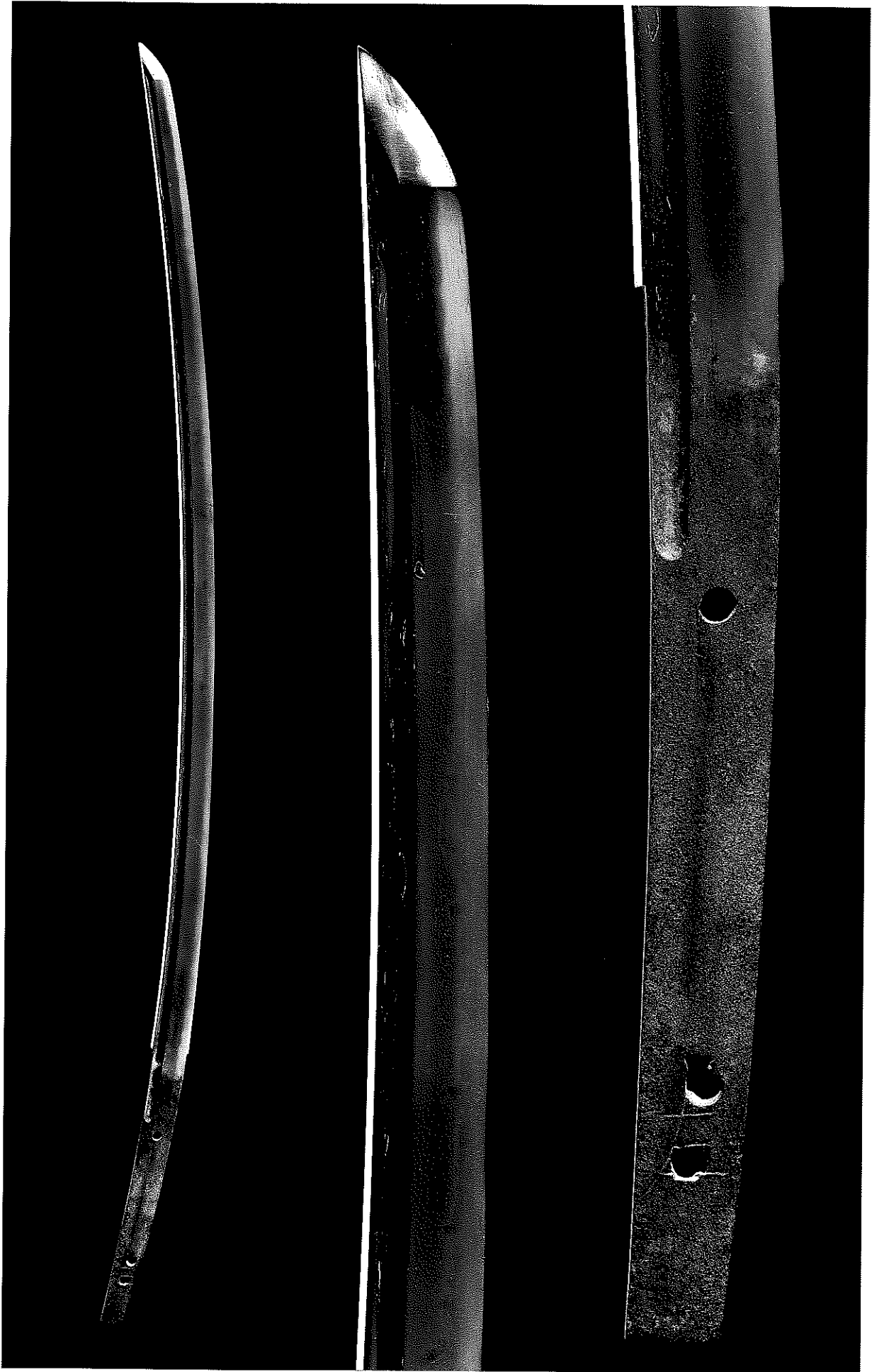


太刀 銘 左
大左文字

刃長二尺六寸四分(八〇・〇cm)
 茎長七寸四分(二二・四cm)
 南北朝時代(十四世紀)
 徳川美術館

鎚造り、庵棟、中反り深く、棒樋あり。地文は板目肌よくつむ、淡く映り出る。刃文はのたれ互の目乱れ、沸えつきよくつき足入る。鍔子は乱れ込み先とがって返る。茎は磨り上げ、先切り。鍔目筋違。茎先に銘あり。目釘孔三つ。

筑州実阿の子と伝えられる左文字は、在来の伝統的な九州一派とは異なる独自の作風を築き上げた。また正宗十哲の一人に数えられる。「享保名物帳」には記されていないが、尾張徳川家では延享二年(一七四五)の「御腰物帳」以降、名物と唱えている。同書には、一番目の「物吉貞宗」から「池田正宗」、奈良屋貞宗」に続き、第四番目に「大左文字御刀、元禄六西折紙有、代金百枚、銘有 長貳尺六寸五分半両方樋有、名物」と記されている。寛永二年(一六二五)二月二十六日の将軍家光の尾張家初代義直邸御成の折に義直が拝領した。この太刀は、家康の遺産分配予定帳「駿府御分物刀剣元帳」に、「大左文字大坂物之内 本阿弥より」と記された品で、『豊臣家御腰物帳』に記された慶長十六年(一六一二)三月、所謂「二条城会見の際に家康から豊臣秀頼に「鍋通し正宗」脇指とともに進呈された「大左文字」であろう。



刀 無銘 貞宗

幅広貞宗(名物御掘出貞宗)

刃長二尺三寸三分(七〇・五cm)

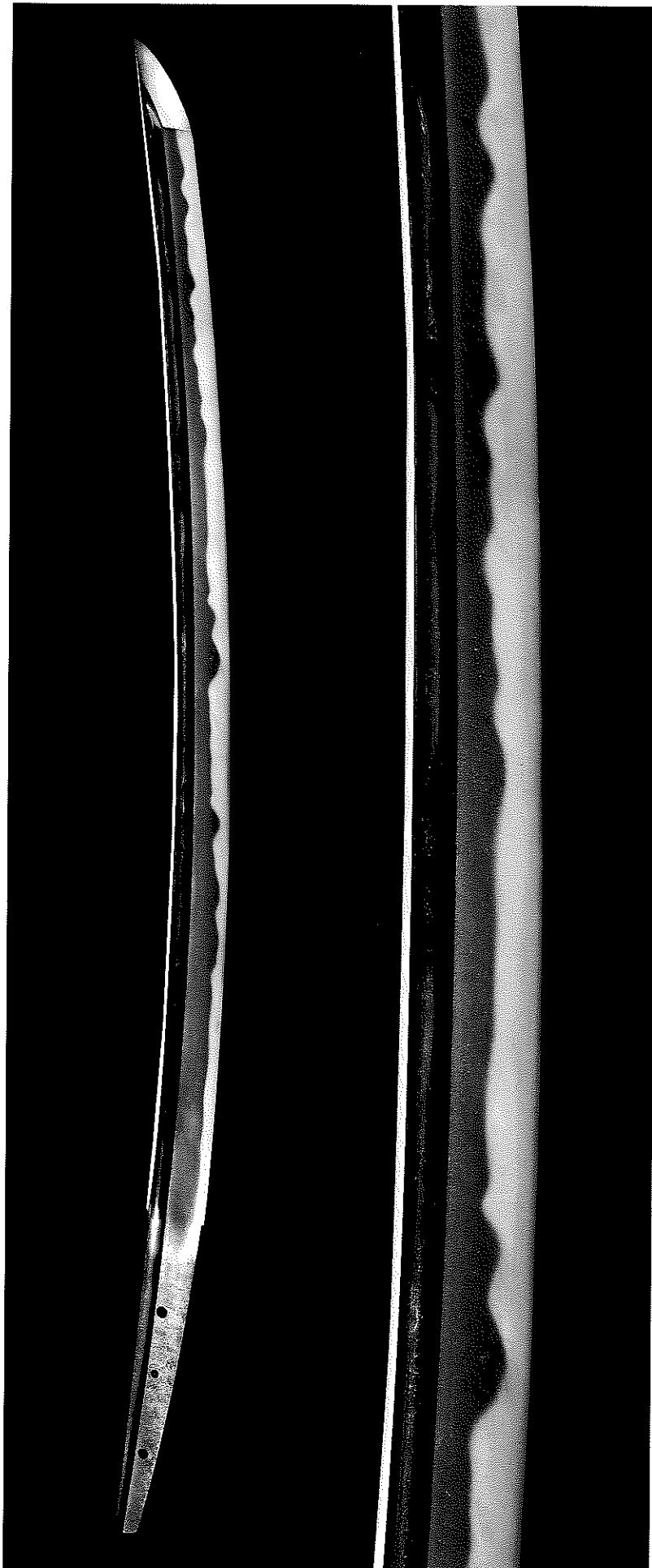
茎長六寸三分半(一九・二cm)

鎌倉～南北朝時代(十四世紀)

貫録備わる刀。姿は鎬造り、庵棟、身幅広く大鋒。地文は小板目つみ、地沸細かにつき、地景現れる。刃文はのたれ調に互の目と丁子を交じえ、足・葉盛んに入り、変化に富んでいる。鍔子は乱れ込んで、先尖りところに返る。表裏棒樋掻き通す。茎は大磨り上げ、先剣形、鍔目勝手下がり、目釘孔二個、無銘。

貞宗の鋒の作風は、身幅が尋常で中鋒と、広く大鋒とがあるが、この刀は最も大きな鋒であり、後期の作と思われる。

本刀は『駿府御分物刀剣元帳』には、上々御腰物に記されており、「御ほりだし貞宗」として、既に將軍家に残すことになつていた。『享保名物帳』には、「家康公於伏見、関ヶ原以後、被召上、正宗之御目利にて光徳に被仰付、貞宗に極めて上る。依之御掘出と御名付け被遊候由」とある。家康が関ヶ原の戦で大勝して意気揚揚のとき、伏見で見出した刀、これを正宗として光徳に鑑定させたら、貞宗との極めであつた。それで御掘出貞宗と命名したとある。元和二年(一六一六)四月八日、家康は薨去する九日前のこと、形見分けとして掘出貞宗を前田利常に贈つた(『徳川実記』)。「加賀前田家 表御納戸御道具目録」には、「十五番 御拝領帳巻として、一、貞宗御刀 長式尺参寸壹歩 代金五拾枚折紙 但折紙二者御掘出貞宗有之」とある。前田家では拝領の第一に掲げている。万治二年(一六五九)に本阿弥光温が代三千貫と極める。まさしく前田家の御家名物であるが、『享保名物帳』にも載っている。前田家から出た折に、あまりの貫録に「幅広貞宗」といひ慣らわされ、『享保名物帳』を確かめることをしてこなかつたのであろう。



刀 無銘 長義

八文字長義

刃長二尺五寸八分(七八・三cm)

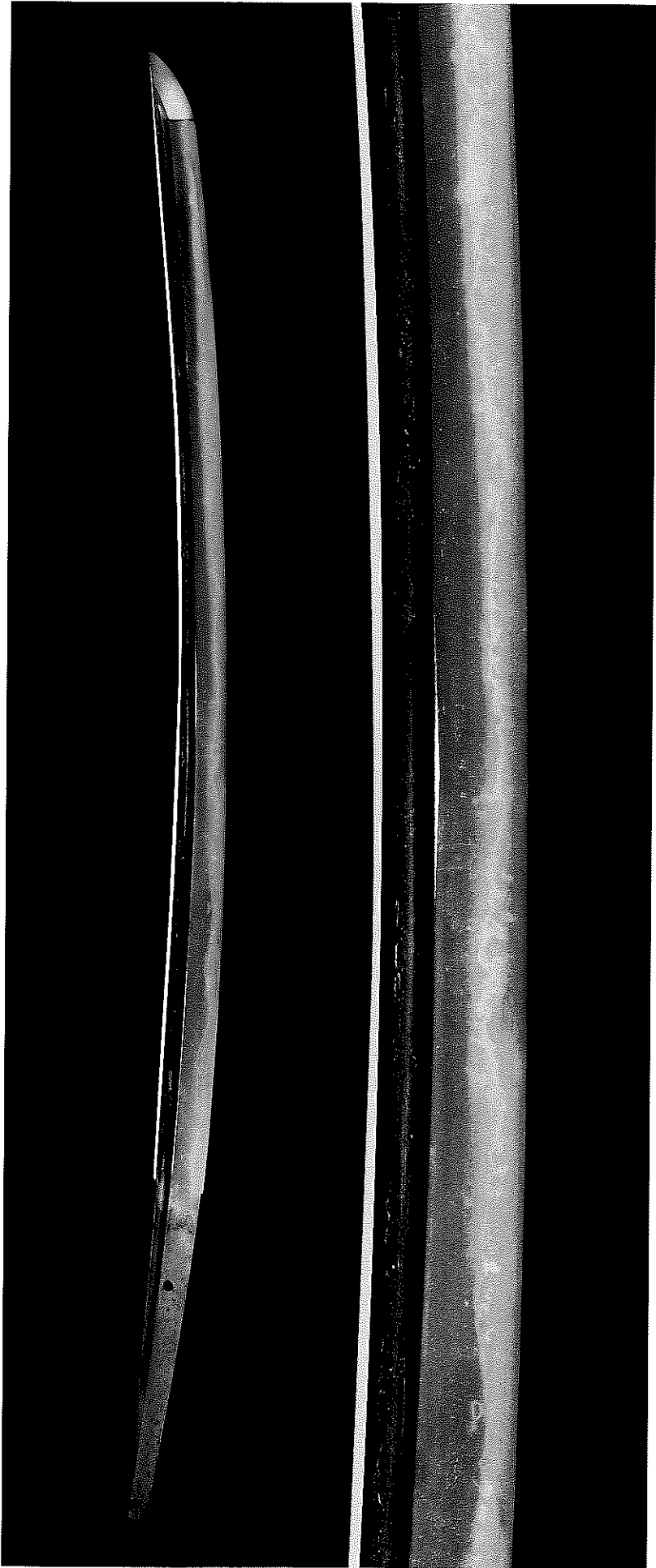
茎長七寸六分(二三・〇cm)

南北朝時代(十四世紀)

地文は板目、地斑映りである。刃文は大乱れ、互の目に丁子、足・葉盛んに入り、飛び焼きがある。銚子は乱れ込んで、尖りごころに返る。彫は表裏棒樋掻き流す。茎は大磨り上げ、先栗尻、鑢目勝手下がり、目釘孔二個、無銘。

長義は、備前長船にあつて、長船の本流と異なり、自由奔放な作風を特色とする。南北朝時代、相州風の作風を得意として、なかでも本刀は最も激しい作である。

『佐竹家腰物台帳』によると、永祿十年(一五六七)小田原の北条氏が大軍をもつて、常州新治西郡下妻(茨城県下妻市)の城主多賀谷政経を攻めた。政経の援軍として出陣していた佐竹義重が、長義の大刀を揮つて北条方の騎馬武者の頭上から一撃したところ、兜もろとも頭部が真つ二つにわれ、馬の左右に八文字形になつて落下した。それで八文字長義と伝えられたという。



重要美術品

短刀 銘 吉光

庖丁藤四郎

刃長七寸二分(二一・八cm)

茎長二寸八分(八・五cm)

鎌倉時代(十三世紀)

徳川美術館

平造り、庵棟、表裏角止めの刀樋に連樋加がある。連樋は砥ぎへつて僅かに残る。寸詰まり重ね薄く身幅広し。地文は小板目つんで地沸えつく。裏元にふくれ破れがある。刃文は直刃に小乱れ交じり、刃ぶちこまかに沸えて匂い深く小足入る。銚子は小丸に返り小沸つく。茎少し磨り上げ、もとの鑢目右手下がり。目針孔三。銘は「吉光」と大振りに切る。

この短刀を庖丁と呼ぶのは、特に身幅が広く、形が庖丁に似るところからきている。『享保名物帳』の焼失之部にある多賀豊後守所持の「庖丁藤四郎」とは異なる品で、尾張義直の相続した家康の遺産刀剣帳『駿府御分物帳』『御腰物帳』に「刑部少輔、ほうてう吉光」と記され、もとは「刑部少輔」即ち大谷吉継所持の品であった。



太刀 銘 備前長船住守家
兵庫守家

刃長二尺三寸九分(七十二・四cm)

茎長七寸一分(二十一・五cm)

鎌倉時代(十三世紀)

徳川美術館

鎬造り、庵棟、腰反り高く肉置き豊かで、小鋒猪首ごころになる。地文は小板目つんで強く乱れ映り立つ。刃文は丁子乱れに蛙子交じり、匂足盛んに入り華やかな出来である。銚子は乱れ込み焼詰めに僅かに返る。棟に地荒れがある。茎は磨り上げ、先刃上がり栗尻、元鑢目切り、棟平、目釘孔二。銘は鎬地に「備前国長船住守家」と切り付けてある。

守家は備前畠田を代表する刀工である。その作風は長船の光忠や、その子長光に共通する点が多い。この太刀は地刃とも健全で、銘文を珍しく「長船住」と切った守家の傑作である。

『享保名物帳』にはこの太刀は所載されていないが、尾張徳川家の「延享二年御腰物元帳」以降の尾州家道具帳では「名物」と記されている。

この太刀は家康の遺産分配予定帳である『駿府御分物刀剣元帳』、尾張家『駿府御分物帳』によって、家康遺産として尾張初代義直が受け継いだことがわかる。名物の名である「兵庫」の由来は、前記の帳に「高野より」「高野ヨル出ル」の注記にある。「兵庫」とは信長に仕えた美濃出身の武将丸毛兵庫頭長照の愛刀との意である。兵庫頭の子親吉は、関ヶ原の戦で石田三成に味方したため、敗戦後高野山に身をひそめ、のち加賀に走り、名を丸毛道甫と改め前田利常に仕えた。

